

2018年度 古代世界文化研究所 総会／研究集会報告要旨

東京大学本郷キャンパス向ヶ岡ファカルティハウス

2018年11月24日

第一報告 竹尾美里（元名古屋大学大学院）

「北ギリシアの初期鉄器時代：Toroneの遺跡発掘報告書より」

トロネ(Torone)の遺跡は北ギリシア、カルキディケ半島のうち中央にあたるシトニア半島の南端に位置する、初期鉄器時代からビザンツ時代までの層が確認されている遺跡である。古典期には、ペロポネソス戦争時にアテナイとスパルタの戦いに巻き込まれるポリスとして登場する。

これまで北ギリシアの考古学的調査といえば、古代マケドニアに関連する遺跡に集中し、1970年代以降内陸部では活発に調査が行われてきたが、半島エリアは長い間見落とされてきたといっても過言ではない状況であったという。そのような状況下においてトロネは1970年代から単発的に調査が行われてきた。今回の報告では、初期鉄器時代の墓域の発掘に関する報告書、J. K. Papadopoulos, *The Early Iron Age Cemetery at Torone* (2005)を参照し、見つかった134基（火葬118基、土葬16基）とその副葬品について紹介する。

第二報告 長谷川岳男（鎌倉女子大学教授）

「スパルタ研究の近年の動向について」

1980年代以降、スパルタ史研究の進展は著しく、我々が理解していたスパルタ像を大きく塗り替えているが、このような動向はこれまで我が国で紹介されることがなかった。しかし本年、古山正人氏が『史学雑誌』（「スパルタ史研究の現在」第127編第7号、36～38頁）で簡単に指摘しており、ようやく広く知られるところになったと言えるであろう。本報告でもこの動向を紹介するが、その全てを扱うことは、与えられた時間も報告者の能力もはるかに超えていることなので、80年代以降のスパルタ史研究の展開を概観した後、次の2点に焦点を絞って近年の動向を紹介したい。まず考古学の成果や史料の読み直しなどにより活発な議論が展開されている、リュクルゴス体制の成立を取り上げる。次いで古山氏も指摘しているが、わが国ではあまり注目されない西洋世界におけるスパルタ認識の受容史研究の活況を紹介したい。

第三報告 橋本資久（文部科学省）

「枢要徳のレトリック」

クテシフォン提案のデモステネス顕彰決議（336BC）では ἀρετή と ἀνδραγαθία が ἔνεκα 句内
で言及されていたとアイスキネスは伝える。アイスキネスは「冠裁判」（330BC）で ἀνδραγαθία
を狭義の「勇敢さ」を示す語と捉え、デモステネスがその徳とは対極に位置し、顕彰に値せぬ
臆病者だと告発する。それに対してデモステネスは徹底してその語を排除したうえで反駁し、
顕彰理由として自らの事蹟を具体的に挙げることでアイスキネスによる非難を回避する。デモ
ステネスの反応のみならず 2009 年に報告された並行例（= IG II³ 1 402）（c.345-335BC）からも、
決議文中におけるこの語の存在は否定しがたい。しかしそもそも ἀνδραγαθία を入れて決議を
提案したのはクテシフォン（とその背後にいたと考えられるデモステネス）である。なぜ彼ら
は提案にこの枢要徳を含めたのか、その背景を探りたい。

第四報告 齋藤貴弘（愛媛大学准教授）

「宗教的言説と説得性—相続関連弁論を中心に」

法廷弁論においてしばしば、宗教的な言説・トピックが言及される。世俗の係争案件と直接
関わりないこれらの宗教的言説については、アリストテレス『弁論術』の要件に適用させる形
で、これまでも「説得」に寄与するレトリックとして説明されてきた。しかし、その説得性の
所以は、「敬神」や「信仰心」あるいはその対極としての「不敬」といった抽象的な概念に還元
されるに留まり、その効果は自明のもののみなされているように思われる。宗教的言説は、説
得のためには使えるものは何でも使うという法廷弁論戦術における「付け足し」に過ぎないの
であろうか。本報告では、イサイオスの相続関連弁論を中心に、相続という「場」において、
宗教的言説のもつ説得性・機能の所以を古代ギリシアの社会構造、すなわち「ヒエラーホシア」
からなる「世界」観の枠組みから、構造的に且つ、より具体的（具象的）な形で意味づけ、理
解することを試みたい。